

さきそう

姫路獨協大学附属図書館報

No. 34

2009. 1

目次

影あり 仰げば月 …図書館の思い出…… 1

本学の数学教育は如何にあるべきか…… 3

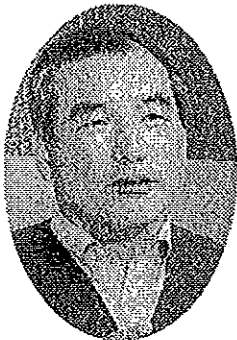
学生図書委員会の活動・利用状況の推移…… 5

図書館日誌・図書館運営委員・学生図書委員…… 6

NEWSLETTER OF H. D. U. LIBRARY

影あり 仰げば月 ……図書館の思い出……

外国語学部長 岡田 勝明



図書館にまつわる思い出といえば、まず思い浮かぶのは、国会図書館を訪れて、手に入らない本や資料等のコピーをそろえたことである。探して得られなかった本に出会える喜びが、体の芯から湧くような感じだった。

「国会図書館」は、「国立国会図書館法」に基づいて設立、運営されている。その前文は、「真理がわれらを自由にするという確信に立って憲法の誓約する日本の民主化と世界平和とに寄与することを使命としてここに設立される」と、謳っている。国内で出版されたものは、すべてこの図書館に収集保存される。「図書館が公平に資料を提供してゆくことで国民に知る自由を保障し、健全な民主社会を育む礎となっていかなばならない」と考えられているのである。

国外での図書館利用の思い出は、ドイツ語圏で最大級の図書館の一つ、ドイツ・バイエルン州の州都ミュンヘンにある「バイエルン州立図書館 (Bayerische Staatsbibliothek)」にかかわる。その前身は、バイエルン侯の宮廷図書館である。

在外研修で滞在していたとき、日本語の新聞が一日遅れであったが、自由に読むことができ、この図書館を一時期よく利用した (当時はインタ

ーネットの登場など、まだ私などには想像もできない時代であった)。驚くべきは、旅行者でも手続きをすれば、貸し出しを始め自由に利用できることであった。

ミュンヘン大学図書館や哲学科の図書館等を自由に使うことを許可されていたから、本を借りて読むには大学図書館のほうが気軽であった。ただやはり雑誌の収集や、蔵書数にかけては、大学図書館と雲泥の差があった。一昨年、八十八歳で亡くなったミュンヘン大学正教授ラウト先生のご自宅で、私が研究している J.G. フィヒテについての、私が作成した、多数にわたるドイツ語論文のリストをチェック、評価してもらい、それらのコピーを、ラウト教授の愛弟子、ミュンヘンアカデミーのフクス先生の協力を得て、バイエルン州立図書館で収集できたことは、感激の思いとともに、忘れられない。

しかしなんといっても、心に染み入るような図書館での時間といえば、ミュンヘン郊外の、ベネディクト派修道院「ザンクトオッターリエン」の図書館が心に浮かぶ。この修道院では百人以上の修道士が、外部の生活から自立して、共同生活をおくっていた。敷地も広大であった。

ヨーロッパの思想文化の研究には、修道院の体験が必要と考えて、日本の禅宗にも関心を持って交流しているザンクトオッターリエン修道院に

丸々ヶ月、宿泊、食事、おやつ、夜食までもすべて、お世話になった。帰国のさい、修道院長に滞在費を請求してくれるようお願いしたら、「これがベネディクト風の客人のもてなし方だ」と言って、いささかのものも受け取らなかった。滞在していたのは、洋梨の実る季節で、修道院の敷地にはたくさんの梨の木が植えられており、夕暮れ時の散歩のついで、しばしばもいで部屋で剥いて食べたが、そのやわらかくてすべすべした甘さは、いまでも如実によみがえる。

日に何度かミサがある。ことに印象深かったのは、就寝前のミサであった。そのさい必ず歌われた賛美歌は、「サイモンとガーファンクル」による、映画「卒業」の挿入歌ともなった、「サウンド・オブ・サイレンス」の、もとの歌であった。母音を響かせるラテン語の賛美歌に、深まる夜の闇が織り合わされる。どういうわけか、人間の「一生」ではなく、人間の「一日、一日」ということが、毎日毎日、胸にこたえた。

キリスト教の新約聖書には、四つの「福音書」がある。福音書は、死と復活に至るイエスの言行の記事で、罪の贖罪による救いを伝えるものである。そのうちの一つに、「ヨハネによる福音書」がある。この福音書にだけ記されているプロローグの冒頭に、「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。」という有名な文言がある。ここで「言」がどのような意味なのかは、簡単には、とうぜんいえない。「言」の原語は「ロゴス」で、「イエス・キリスト」のことを指すと解釈されている。いずれにしろ「ことば」がヨーロッパの宗教の根幹にあって、そこから思想も文化も枝や葉を茂らせてきた、ということである。アウグスチヌスの『告白』を見れば分かるように、一人の人間の人生も、「神との対話」の中で形成されてきた。ヘブライズムというキリスト教の伝統のみならず、ヘレニズムの伝統においても、「ことば」は中心的な役割を担ってきた。古代ギリシャにおいて、「ソクラテスの対話」から、プラトン哲学も形成されたのである。

このような伝統の中で、「ことば」の集合体「図書館」が、宗教的とすらいえる雰囲気醸成することが起こる（「バイブル」の語源はヘブライ語の「本」を意味する語にさかのぼる）。ことに修道院の図書館では、ヨーロッパの知の伝統を、本につもった塵ですら匂わせている。ザンクトオッターリエン修道院にも、天井のものすごく高い、というか、吹き抜けになった立派な図書館があった。図書館で

過ごす時空の中に、異次元への通路があった。

ところでさきにふれたサイモンとガーファンクルの「サウンド オブ サイレンス」には、「people hearing without listening」というフレーズがある。ただ音を耳に入れる(hearing)だけでは、「沈黙の声」は聞こえない。それを聴くには、音という現象の背後にある、それ自身は音にならないが、しかしそこから音が生まれてくるものに耳を傾け(listening)しなければならない。それは、心で聴くとか、心に響かせる、というように表現してもよい。

つづいて「my words like silent raindrops fell and echoed in the wells of silence」とも詠われているが、「沈黙の井戸」とは「心」のことであろう。そもそも「心」という、現象に表れる「実体」はない。だからたとえば、たんなる「物理音」が「歌」になるには、現象としての音は消えるのではないが、透明にならなければならない。心に届いて、「音」が「歌」になるからである。この歌詞にあるように、現象としての「私のことば」は、音もなく降る雨だれのように透明となって、心の中へ透過して、沈黙の心に響きいる。沈黙に響くことで、「ことば」はほんらいの自己の在処に在るようになる。

たんなる音であり物である「ことば」に意味が生れるのは、心に響きこだまするからである。「ことば」に響く沈黙のこだまを「聴く」ことが、本を「読む」ことであり、また「書く」こともやはりそのこだまを聴くことに帰着する。図書館は、音に響く沈黙の声に聴き入る大きな耳であってほしいと思うのは、時代遅れのアナクロニズムなのであろうか。

修道院の礼拝堂の片隅で、もう歩行すら困難になった老いた修道士が、ロザリオを手繰りながら祈る姿をよく眼にした。彼等は、死も修道院で迎えるつもりなのである。その姿そのものが、大きな深い影のように見えた。礼拝堂のローソクのうす暗い光が、彼等のからだそのものを影に変えていたのである。日本語では、「月影」が「月光」を意味するように、「影」はまた「光」であるが、死を待つ老修道士の光景は、影と光が浸透しあっていたように思う。

深夜、図書館の落とす影から眼を上げれば、月の光があった。礼拝堂の老修道士を見かけた後ただけに、その時の静かな時間は忘れ難く心に刻まれた。

(おかだ かつあき)

本学の数学教育は如何にあるべきか

—— 岸本裕史著「見える学力、見えない学力」を読んで ——

経済情報学部 山岸 規久道
(併任 経済情報研究科長)



経済情報学部では一年次を対象に「経済・経営基礎数学」を必修科目として開講していて、前期に線形代数学（行列式連立一次方程式の解法）、後期に微分法（導関数、極値問題）を教えている。

しかし、大学生の基礎学力の低下が広く社会問題化している

昨今、何も本学部に特有の現象ではないのだが、式の変形と言った基本的な事柄ですらも授業中に丁寧に何度も説明をしなければならぬ状況に陥るようになり、2004年後期、何か対策は無いものかと同僚教員の秋本先生（現経済情報学部長）と真剣に話し合いを行った結果、学内に「数学検定対策講座」を立ち上げた。数学検定に合格するという身近な目標を通して、学生たちの学力をアップさせようという秋本先生のアイデアである。最初は20名にも満たない受験者であったが、回を重ねるごとに徐々に増えていき、2008年7月にはついに120名を超える学生が受験した。ここまで大きな輪になったのは、法学部の星野先生と大崎先生のご尽力によるところが実に大きい。両先生は「数学検定対策講座」の趣旨に快くご賛同下さり、数学と法律という結び付きに意外性と将来性を感じられて積極的に数学検定の受験を学生に勧奨して下さいました。

本稿では本学の数学教育のあり方を、岸本裕史先生の著書「見える学力、見えない学力」（国民文庫846、改訂版、大月書店）をコンパスとして、特に、大学生にとって『見える学力、見えない学力』とは何であるかについて考えてみたい。

数学教育の必要性

「数学検定」とは日本数学検定協会（<http://www.suken.net/japan.html>）が実施している実用数学技能検定のことである。この検定試験は受験階級が全部で10階級あり、我々は中学卒業から高校1年程度と言われる数検3級や準2級を合格目標に設定して指導に当たっている。

そもそも教育とは何であろうか。それは子供た

ちがこれから社会で生きていくために必要となる知識や技能を、社会に出る前に身に付けてもらうために行うものである。教育を行う主体が親であろうとその他（国家など）であろうとその本質は変わらないと考える。授けなければならない知識や技能は時代、環境、歴史などの背景によって様々に変わってくるだろうが、現代の社会においては、その大枠を定めるのが小・中学校の義務教育である。言い換えれば、必要最低限の知識や技能の基準が中学卒業程度という観点で制度設計されているのが現代の日本社会であると考えられるのである。数検3級（もしくは準2級）程度の知識や技能を持たないと言うことは、すこぶる大きなハンディキャップを自らに負う結果となる。もちろん、どんな事にも例外はあり得る。数学は全くダメという人でも立派な人は沢山いるだろう。

しかし、今、中学卒業程度の数学ならほぼ身に付いている100人の集団と、あまり良くは身に付いていない100人の集団があるとするとき、どちらの集団がより高い社会的地位やより多くの経済的富を得るだろうか。ここに数学教育の必要性に関する厳しい現実を容易に見いだせる。自由意志に拠る場合は別として、構造的に置かれている社会的もしくは経済的な格差を解消するには、何よりもまず中学卒業程度の学力が必要最小限なのである。大学に学びながら数学の必要性をあまり見いだせない学生にとっても、現代社会に生きる限り、数検3級（もしくは準2級）はとても重要な人生のコンテンツである。

大学生にとっての『見える学力、見えない学力』

岸本裕史先生は長く小学校で教鞭を執られ、その体験を基に著書「見える学力、見えない学力」（国民文庫846、改訂版、大月書店）を書かれた。この著書を通じて脈々と流れるものは小学校教育への熱情であり、6歳から12歳までの児童への教育はいかにあるべきかを説くことがこの著書を書かれた目的であろうと拝察する。それ故、大学教育とは対象年齢や背景を異にするため、説かれている事のすべてが我々の場合に適用できる訳ではないが、著書に述べられている考え方は、小学生と大

学生と言う年齢による違いを越えて普遍的なものであると思われる。そこで、この著書が説く『見える学力、見えない学力』は、大学教育の場合には果たしてどのようなものになるのであろうか。

「見える学力」とは文字通りその子が現に持っている学力であって、漢字が書けるとか計算ができるとか言ったもので、試験などで測ることができるものを指し、一方、「見えない学力」とは、この見える学力を獲得する能力のことであり、見える学力を獲得するに至ったすべての要因をも意味する。岸本先生の言葉を著書(37頁)から引用すれば、

【冰山を思い浮かべて下さい。冰山というものは、大部分が海面下に沈んでいて、八分の一だけが海面上に姿を見せています。子どもの学力も、それと似ているのです。テストや通知簿で示される成績は、いわば見える学力なのです。その見える学力の土台には、見えない学力というものがあります。見える学力をたしかに伸ばすには、それを支えている見えない学力を、うんとゆたかに太らせなければならぬのです。貧弱な土壌では、果樹の実も、ちっぽけなままでしかありません。】と述べておられる。要するに、本当の意味での正しい教育とは、「見える学力」に囚われるのではなく「見えない学力」にこそ目を向けるべきであり、それをしっかりさせる事なのだ、と説かれているのである。

ところで、ここで、教検3級の問題を一つ出しましょう。中学卒業程度の問題と言っても決して易しいものではなく、正解を(3分以内に)出すのはなかなか大変だという事がお分かり頂けるでしょう。

問題 「冰山は全体積の八分の一(12.5%)が海面上に出る」と言われているが、これは概数である。氷の比重を0.91~0.92とし、海水の比重を1.02~1.03とするとき、冰山は全体積の何パーセントが海面上に出るのか、その範囲を求めよ。ただし、少数第二位を四捨五入して、少数第一位まで答えよ。〈答：9.8%~11.7%〉

教育機関として大学が小学校と大きく異なる点は、教育の対象となる学生と児童との年齢の差はもちろんだが、学生にはまず入学前に選抜試験を受けてもらわなければならないのと、大学を運営するための経費は大部分を学生が納める学費で賄われている事にある。小学校の場合、私立の小学校は別にして、通常はある範囲に現住所をおく児

童はその地域の小学校へ進学する事があらかじめ決められており、小学校の運営上の経費は市などの公費で賄われる。特に、大学では18歳人口の減少と昨今の大学機関の急増のため、他大学との差別化を図って学生を確保する事が第一義に考えられるようになり、こうした現状は大学教育の目標、方法に大きな影響を及ぼし、本来の大学教育の在るべき姿——教育と研究を車の両輪の如く互いに働かせるという姿——を歪めてしまった。

社会が大学教育に求めるものは、学生が社会人として自立する事(もっとザックパランに言えば、社会に貢献できる人材を送り出す事)を目標とした教育である。この点で、人間としての基礎を築く事を目標として求められる小学校教育とは異なるであろう。しかし、その教育上の目標を達成するために執られる方法は、岸本先生の説かれる考え方を筆者なりに述べれば、「今、表に見えている部分だけを良くしようと企ててもそれは成功しない。そうではなく、その背後に控える見えない部分の方がずっと大きいものであり、従って、それから良くしようとしていかなければ、自ずと見える部分も良くなっていかない。」となり、これは大学教育にも通用するものであろう。

では、大学生にとってこの見えない学力とは何であり、それを良くするには具体的にどんな方法があるのだろうか。実の所、筆者にははっきりとした答えはまだない。数学検定試験はその中で基礎学力に関する一つの試みであると思っている。しかし、すでにいろいろな方々によってヒントや方向性はいくつか示されていると思う。その一つに、規則正しい生活習慣やきちんとしたしつけ(常識やマナーを含めて)がある。岸本先生の著書でもその事が触れられているし、また、例えば本附属図書館報『さぎそう』(32号)では本学健康管理室長(当時)の大西先生が「早起き・早寝・朝ごはん」と題して規則正しい日常生活の重要性を説かれている。結局、大学生にとっての「見えない学力」とは、小学生のそれとあまり変わらないのではないかと、言うのが筆者の結論である。

(やまぎし きくみち)

※『見える学力、見えない学力』(国民文庫)

配置場所：2階文庫新書コーナー

請求記号：375.1//KI

《学生図書委員会の活動》

より良い図書館づくりのため、学生であれば学部・学科に関係なく、立候補することによって誰でも学生図書委員になる機会があります。学生図書委員会では、学生の図書館に対する意見や要望を通して、図書館を身近に感じてもらうために、次のような仕事を含め様々な活動を行っています。

・壁新聞「しらさぎ」

第6号が発行されました。学生図書委員会のおすすめの本や名言コーナー等があり、学生との交流を主体にした壁新聞となっており、ブログも作成されています。

入り口スロープ横の掲示板にも張り出していますので、ぜひご覧ください。

・図書の配布活動

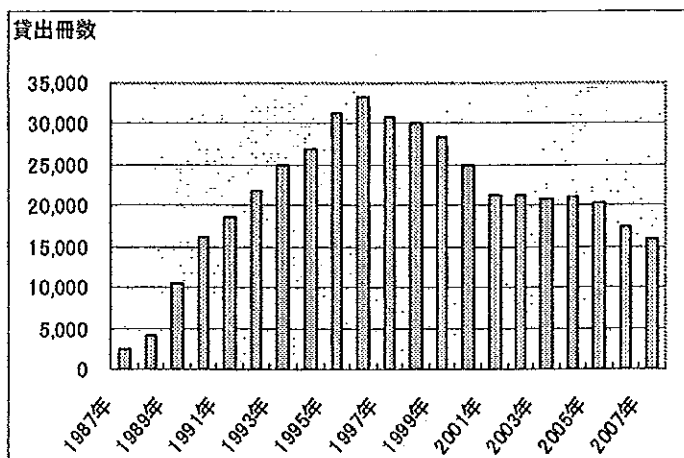
2008年10月18日(土) 大学祭開催時に図書館の除籍・廃棄図書及び教職員からの寄贈図書の配布を行いました。併せて行った募金活動では、17632円集まりました。今回集まりました寄付金は、総務課を通じて「赤い羽根共同募金」に全額寄付させていただきました。

ご協力いただいた皆様の善意に心から感謝し、お礼申し上げます。

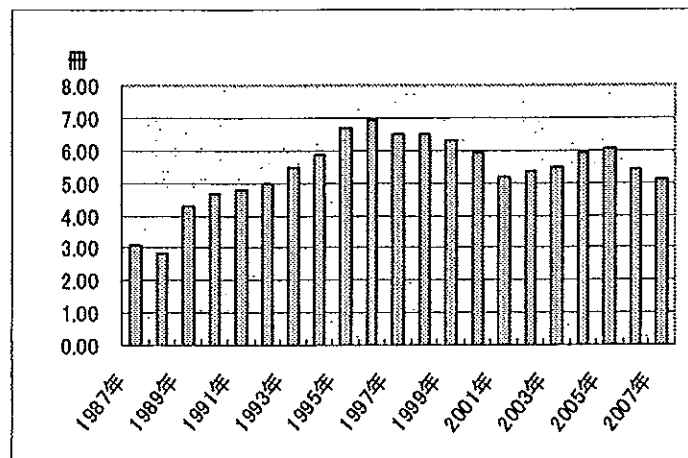


《姫路獨協大学附属図書館利用状況の推移(1987- 2007)》

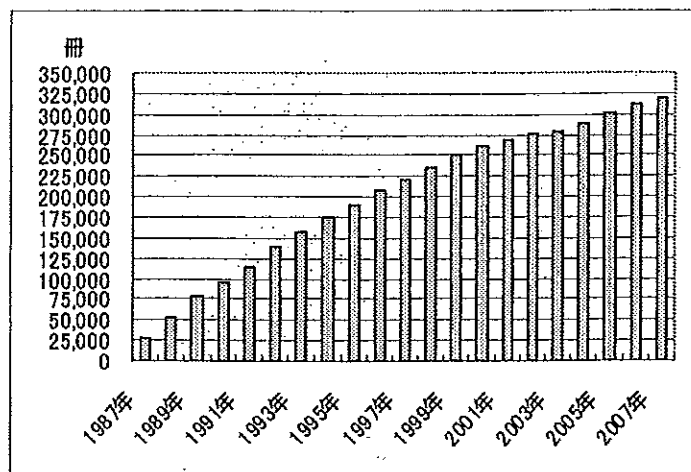
1：学生貸出冊数の推移



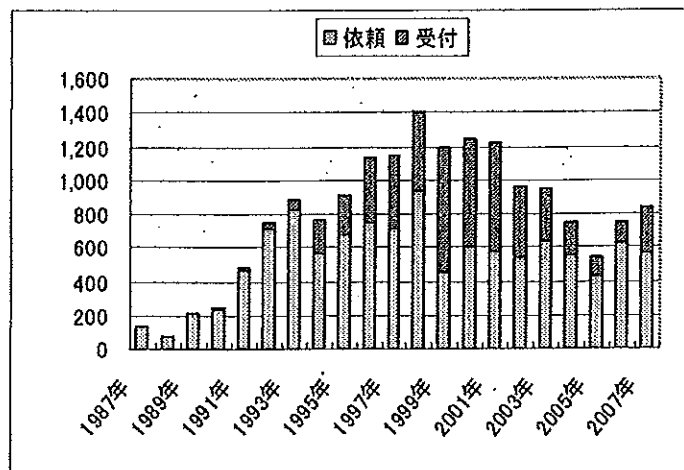
2：学生1人あたりの貸出



3：蔵書冊数の推移（研究室配架分を除く）



4：相互利用件数の推移



図書館日誌

(2007)

- 4.3 利用開始
新入生対象図書館利用説明会(~4/27)
- 4.17 法新入生図書館ツアー
- 4.19 法新入生図書館ツアー
外(英) 新入生図書館ツアー
外(韓) 新入生図書館ツアー
- 4.24 法新入生図書館ツアー
法2年生図書館ツアー
院生(経情・法) 新入生図書館ツアー
- 4.25 経情新入生図書館ツアー
- 4.26 法図書館ツアー
外(英) 新入生図書館ツアー
第一回図書館運営委員会
- 5.1 医(言聴) 新入生図書館ツアー
医(こども) 新入生図書館ツアー
- 5.2 経情新入生図書館ツアー
- 5.9 経情新入生図書館ツアー
- 5.10 外(日) 新入生図書館ツアー
- 5.16 経情新入生図書館ツアー
- 5.23 経情新入生図書館ツアー
- 6.21 阪神地区相互利用担当者連絡会(西岡)

- 6.22 国立情報学研究所「ILL 文献複写等料金相殺サービス」に係る視察(西岡)
 - 6.25 図書館運営委員会
 - 7.2 学生図書委員会
 - 7.23 兵庫県大学図書館協議会(神戸女学院大学)(田町)
 - 7.27 学生の長期特別貸出(~9/7)
 - 8.12 夏季休館(~8/18)
 - 9.25 学生図書委員会
 - 9.27 電子ジャーナル・コンソーシアム説明会(福田)
 - 10.9 図書館運営委員会
 - 10.20 大学祭での除籍図書配付(学生図書委員会)
 - 10.22 臨時図書館運営委員会
 - 11.29 阪神地区相互利用担当者連絡会(西岡)
 - 12.10 冬期長期貸出(学部学生対象~12/22)
 - 12.23 冬期休館(~1/6)
- (2008)
- 1.7 通常開館
 - 1.19 大学入試センターに伴う休館
 - 2.5 春期長期貸出(学部学生対象~3/22)
 - 2.22 私立大学図書館協会 阪神地区研究会(田町)
 - 3.26 春期休暇(~4/1)

平成20年度附属図書館運営委員

図書館長	池下 幹彦
外国語学部	
外国語学科	団野 恵美子
ドイツ語学科	鳥谷部 平四郎
英語学科	団野 恵美子
中国語学科	原 由起子
日本語学科	大曾 美恵子
スペイン語学科	中嶋 佐恵子
韓国語学科	高橋 学
法学部	瀧 久範
	高橋 克紀
経済情報学部	山下 和宏
	鉄谷 健介
医療保健学部	
理学療法学科	田中 みどり
作業療法学科	大西 道生
言語聴覚療法学科	鈴木 正浩
こども保健学科	中 磯子

臨床工学科	今村 伸一郎
薬学部	通山 由美 中村 隆典
法務研究科	渡邊 卓也
事務系職員	重枝 一喜

平成20年度附属図書館学生図書委員

外国語学部	
英語学科 3年次生	秀平 唯
4年次生	岡嶋 容葉 太田 陽子 宮原 香枝 貝阿弥 七重
経済情報学部 3年次生	石澤 康匡
4年次生	森 清人
医療保健学部	
作業療法学科 2年次生	市橋 慶二 福井 良毅
こども保健学科 3年次生	石井 西奈

姫路獨協大学附属図書館報 さぎそう No.34

編集・発行 姫路獨協大学附属図書館
姫路市上大野7丁目2-1(〒670-8524)

2009年1月13日発行
ISSN 0915-8189
電話 079-223-6506
Fax 079-223-0928
e-mail library@himeji-du.ac.jp